

共創

第1号

山梨大学教育学部附属特別支援学校

令和7年度 学校通信

校長 田中武夫

2026.1.30

公開研究会を終えて

令和8年1月24日(土)、本校において公開研究会を開催いたしました。当日は、県内外より200名近い多くの教育関係者の方々にご来校いただき、子どもたちの日頃の学びの姿を、授業や講演を通して広くお伝えすることができました。また、保護者の皆様におかれましては、受付や案内等に多大なるご協力をいただき、心より感謝申し上げます。皆様の温かいご支援のおかげをもちまして、盛会のうちに研究会を終えることができました。



本校は、山梨大学教育学部の研究校・実習校として、日々の教育実践を丁寧に見つめ直し、その成果を社会に発信する役割を担っています。公開研究会は、その取り組みの一つであり、子どもたちの学びの姿を通して、よりよい特別支援教育の在り方を、学校内外の皆様とともに考える大切な機会でもあります。

こうした研究や実習の充実は、将来、教育に携わる人材の育成につながると同時に、何よりも、今この学校で学ぶ子どもたち一人一人にとって、より安心で質の高い教育環境をつくることを目的としています。私たちは、「教師のゆとりが子どもたちの安心につながり、教師の笑顔が子どもたちの笑顔につながる」という考えのもと、学校運営を進めてまいりました。

その実現のため、今年度は研究や実習に伴い、1時30分下校など、保護者の皆様にご負担をお願いする場面もございました。そのような中にも関わらず、本校の役割と取り組みの意義をご理解いただき、温かくご協力いただいておりますことに、深く感謝申し上げます。

昨年実施した学校評価においては、保護者の皆様から、本校の学校運営や教育活動に対して高い評価をいただくとともに、教職員からも「働きやすい職場である」との評価が多く寄せられました。これらの結果は、保護者の皆様のご理解とご支援のもとで、教職員が安心して教育と研究に向き合うことができていることの表れであり、そのことが、子どもたちの安定した学校生活につながっているものと受け止めております。



今回の学校通信では、当日、受付や案内等の役割を担ってください、公開授業や講演をご覧いただけなかった保護者の皆様にも、「どのような公開研究会であったのか」「なぜ本校にとって有意義な研究会であったのか」を、授業の具体的な様子とともにお知らせいたします。

◆公開研究会のご報告

本校では今年度、「主体的に学習に取り組む態度を育む授業づくり—教師一人一人の授業力の向上を目指して—」を、学校全体の研究の柱として取り組んできました。子どもたちが自分なりに考え、選び、振り返りながら学んでいく力を育てる授業づくりを大切にしながら、教師が一人一人の子どもに寄り添う関わりを積み重ねています。今回の公開研究会は、そうした日々の実践が、授業や講演の中でどのように形となって表れているのかを、学校内外の皆様と共有する機会として開催いたしました。以下に、小学部・中学部・高等部での当日の公開授業の内容をご紹介します。

【小学部の公開授業から】

小学部では、生活単元学習として継続して取り組んでいる「わくわく集会」に向けた授業を公開しました。節分という季節感のある題材を取り上げ、鬼退治の道具となる「まめ」「たいこ」「いわし」を作る3グループに分け、子どもたちの興味や経験に結びつきやすい活動を設定することで、「やってみたい」「おもしろそう」と感じながら学びに入っていける導入が工夫されていました。



授業では、3つのグループから、子どもたちが自分でやってみたいグループを選び、準備を進めていきます。教師は答えややり方を先に示すのではなく、「どれにする?」「どうやって作る?」「次はどうする?」と問い合わせながら、子どもたちが考え、選び、決める場面を意図的に設定していました。迷ったり立ち止まったりしたときには、教師や友達がそばで支え、必要に応じてヒントを出すことで、一人ひとりの思いを大切にした学びが支えられていました。

思い通りにいかない場面でも、「大丈夫」「もう一回やってみよう」といった温かな声かけの中で、子どもたちは少しずつ挑戦を続け、自分なりのやり方を見つけていきます。こうした経験の積み重ねが、「できた」「やってみてよかったです」という実感につながり、「やってみたい」「できるかもしれない」という自己効力感を育んでいることが伝わってきました。



一人ひとりの小さな一步を大切にしながら、安心して挑戦できる環境の中で学びが前に進んでいく、子どもたちの確かな成長を感じさせる授業でした。

【中学部の公開授業から】

中学部では、「なかまコラボ☆フェスティバル」を題材とした総合的な学習の時間を公開しました。生徒たちは学年をこえたグループで、射的、釣り、輪投げ、ターゲットゲームといったお店に分かれて活動し、お店に来るお客様が楽しめるようにするために、「何を大切にしたいか」「自分はどんな役割を担いたいのか」といったことを話し合いながら、主体的に目標を立て、内容や役割分担を決めて準備を進めてきました。教師は、すぐに答えを示すのではなく、問い合わせや声かけを通して、生徒一人ひとりが自分の目標を意識できるよう支援していました。

当日の授業では、受付や説明、応援など、それぞれが自分で定めた役割や目標を意識して行動する姿が見られました。活動が進む中で、「説明はこれで伝わるかな」「次はこうしたほうがいいかもしれない」と、仲間と相談しながら改善しようとする姿も多く見られ、自分たちで活動をより良くしていこうとする主体的な学びが表っていました。



最後の振り返りでは、自分の行動が目標に対してどうだったかを振り返るとともに、仲間の良かったところや支え合いの場面に目を向ける姿が見られました。対話を通して学びを深め、自分自身の成長を実感しながら「次にどうつなげるか」を考える姿は、中学部ならではの学びの広がりと、その積み重ねの大切さを感じさせるものでした。

【高等部の公開授業から】

高等部では、作業学習（木工班）の授業を公開しました。生徒たちは、「きりの子バザール」での販売を目標に、ペアやグループで役割を分担しながら、製品づくりに継続して取り組んでいます。

授業では、切断、穴あけ、組み立てなどの工程ごとに仕事を分担し、安全に十分配慮しながら作業を進めていました。ペアで確認し合ったり、グループで声を掛け合ったりしながら作業を進めてことで、互いに支え合い、協働する力が育まれている様子が見られました。「お願いします」「ありがとう」「グッジョブ」といった言葉が自然に交わされ、仲間の働きを認め合う姿が随所に見られたことも印象的でした。

また、作業前後にはペアのクラスメートとその日の目標を立て、ともに振り返りを行う時間が設けられていきました。自分の役割を振り返ると同時に、相手の良かった点や助け合えた場面に目を向けることで、次の作業に向けた改善点や協力の在り方を考える学びが大切にされていました。



こうした学習は、製品を完成させることだけが目的ではありません。製品づくりの丁寧なプロセスを通して、働くことの意味や、人と関わりながら自分の役割を果たし、協力して一つの仕事をやり遂げる大切さを実感的に学ぶ、高等部ならではの学びでした。

【帝京大学准教授の中村晋先生のご講演】

講演では、帝京大学教育学部初等教育学科准教授の中村晋先生より、「子どもが主体的に学ぶとはどういうことか」「そのために大人はどのように関わることが大切なのか」について、本日の公開授業の中で見られた具体的な子どもたちのエピソードを交えながらお話をいただきました。

先生のお話の中で、まず強調されていたのは、「主体的な学び」とは、子どもがすぐに一人で何でもできるようになることではない、という点です。むしろ、誰かと一緒に考えたり、迷ったり、立ち止まった

りしながら、「どうしたらいいかな」と考え続けようとする姿こそが、主体的な学びの出発点である、というお話をでした。

また、子どもが新しいことに挑戦しようとするとき、不安や失敗は避けられません。そのときに大切なのは、すぐに正解を教えたり、結果だけを評価したりすることではなく、「やろうとしたこと」「考えたこと」「そこに至るまでの過程」「できたこと」を、大人が具体的なことばで言語化して伝えることだと語られました。「今、自分は何を大切にして取り組んでいるのか」「どんな工夫がよかったです」を、ことばを通して示されることで、子どもは自分の行為を理解し、次にどう行動すればよいのかを学んでいきます。このような関わりそのものが、子どもにとっての学びのモデルになる、という点が強調されていました。

講演では、「振り返り」の大切さについても触れられました。うまくいったことだけでなく、「少し難しかったこと」や「思ったようにいかなかつたこと」を、安心できる大人や仲間と一緒に振り返ることが、子ども自身が学びを調整していく力、いわゆる「自己調整する力」を育てていくというお話をでした。その際にも、大人が子どもの行動や思考を具体的にことばにして返すことで、振り返りの視点や深まり方が、少しづつ子ども自身のものになっていくと述べられました。

子どもは、振り返りを通して、「次はこうしてみよう」「ここは助けてもらおう」と考えるようになります。これは、学校生活だけでなく、将来の生活や社会の中で生きていくうえでも、とても大切な力です。子どもが悩んだり、立ち止まつたりするときは、大人にとっても心配になる場面です。しかし、その姿を評価や指示で終わらせるのではなく、行為や思考を丁寧に言語化し、寄り添いながら伝えることが、子どもの安心感と次の挑戦につながる。そのメッセージは、多くの参加者的心に深く残る講演となりました。

【校長として思うこと】



今回の公開研究会では、小学部・中学部・高等部それぞれの授業を通して、子どもたちが自分なりに考え、選び、振り返りながら学んでいく姿を、多くの場面で見ることができました。教師が答えを先に示すのではなく、「どうしたいか」「どうすればよいか」「どうだったか」を問い合わせ、子ども自身が考える時間を大切にしてきた日々の積み重ねが、確かな形となって表れていたことを、校長として大変嬉しく感じています。

子どもたちは、うまくいくときだけでなく、迷ったり、立ち止まつたりする中でこそ、多くのことを学んでいます。戸惑いながらも自分で選び、仲間や教師に支えられながら振り返り、次につなげようとする姿が各学部で見られたことは、本校が大切にしてきた学びの姿が、着実に根付いている証だと感じました。

本校が何より大切にしているのは、「主体的に学び続けようとする姿」そのものを支えることです。今回の研究会を通して、その姿が子どもたちの中に確かに育っていることを実感できたことを、心から嬉しく思います。

今後も、研究校・実習校としての使命を大切にしながら、子ども一人一人が安心して自分の目標を立て、自分で選び、振り返りながら学びを深めていける学校づくりを進めてまいります。保護者の皆様とともに、子どもたちの歩みを丁寧に見守り、支えていける学校であり続けたいと考えております。

